

京都のキリシタン

—戦国から江戸—

麻 生 将

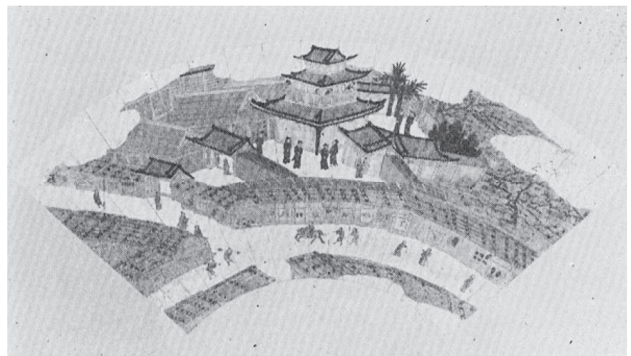
I. 京都とキリシタン

南蛮寺は日日羣集を成すと雖も宗に歸伏せざる者には本尊を拝することなし。南蛮寺には此羣集の人には聊も不構洛中洛外へ人を出し或は山野の辻堂橋の下等に至る迄尋捜非人乞食等の大病難病等の者召連れ來らしめ風呂に入れて五体の清め衣服の與えて之を暖め療養しける程に昨日の乞食今日は唐織の衣服を身に纏い病も自ら心よく快復せる類多し。就中癩瘡等の難病南蛮流の外療を受け数月を歴ずして全快し誠の佛菩薩今世に出現の救済度し玉うなりと近国佗国風説区々也。故に諸国の大病難病に侵され貧賤にて我力に不叶者或は諸醫の療養に治すこと能わざる者貴賤共に南蛮寺に羣集こと不斜。¹⁾

(仮名は筆者が現代仮名遣いに改めた)

これは 1868 (慶応 4) 年の『南蛮寺興廢記』に記された南蛮寺 (第 1 図) の活動の様子である。物珍しさから南蛮寺に連日押し寄せる人々に構わず、キリシタンたちは洛中洛外の貧しい人々や病人を南蛮寺に連れてきては治療を行っており、やがてヨーロッパの医療技術による治療を目当てに貴賤の区別なく多くの人々が南蛮寺を訪れるようになった。

ザビエルらは 1549 (天文 18) 年の来日以降各地でキリスト教の布教を行い、1551 (天文 20) 年に京都を訪れた。天皇や室町幕府の将軍に日本でキリスト教布教の許可を得るためであった。これ以降、ガスパル＝ヴィレラが複数の日本人キリシタンとともに京都での布教を行った。当初は民家を教会としていたが、後に南蛮寺を建立し、冒頭のような医療活動や貧困層への救済活動を行っていたのである。



第 1 図 南蛮寺

神戸市立博物館所蔵「都の南蛮寺図 (狩野宗秀筆、16 世紀後期)」『京都の歴史 第 4 巻 桃山の開花』210 頁より引用

京都のキリシタンの活動や実態については政治史²⁾や医学史³⁾、キリスト教史⁴⁾で多くの先行研究があるほか、考古学の分野ではキリシタン墓碑の研究⁵⁾が進められており、相当の研究蓄積がみられる。また、京都のキリシタンについて、16 世紀から 17 世紀にかけて包括的に考察した先行研究⁶⁾もある。周知のように日本のキリシタンは 16 世紀後半から 17 世紀初めにかけて各地で活動していたが、豊臣秀吉による伴天連追放令や徳川幕府によるキリシタン禁令および弾圧によってその大半が姿を消した。京都においても南蛮寺やだいうす町 (キリシタンのコミュニティ) が武士政権によって保護され、そして消滅していった。

同時代の史資料にはだいうす町に関する記載はほとんど見られないが、Ⅲ章で述べるように、17世紀以降に出版された京都の地誌書籍にはその位置や由来、歴史がたびたび記述されている。

ところで、先述した歴史学の研究分野では京都の洛中全体のキリシタンに関する諸研究が行われてきたが、キリシタンの日常生活および信仰生活の拠点であっただいうす町については史資料の制約もあってか、詳細な検討は必ずしも十分に行われてこなかった。また、近世のキリシタン研究の多くは幕府による統制、弾圧、迫害に関するものであるが、近世を通じてキリシタンに関する記録および記憶がどのように共有され、受け継がれていたかについても十分に検討されているとは言い難い。後述のようにキリシタン禁制下でキリシタンに関する記録および記憶が全く途絶えたわけではなく、むしろ様々な出版物を通して近世社会に広く共有されていた。こうした記録／記憶はだいうす町の場所に関連する情報や知識、すなわち地誌情報ないしは地理的知識が重要な柱となっていた。そういうわけで、京都のキリシタン研究については、歴史学や考古学の分野のみならず地理学—特に歴史地理学—の研究蓄積が望まれるところである。

そこで本稿では中世後期から近世初頭にかけて京都の中でだいうす町が立地していた場所とその意味について検討する。また、だいうす町や南蛮寺の情報および記憶、言い換えればキリシタンに関連する地理的知識が江戸時代を通じてどのような形で共有されていったのかを検討する。すなわち、本稿は京都のキリシタンの歴史地理学の試論である。

Ⅱ. だいうす町と教会堂の立地とその意味

1. 16世紀の京都のキリスト教

先に述べたように、16世紀後半から17世紀初頭の京都にはだいうす町と呼ばれるキリシタンのコミュニティが存在していた。このことは当時の資料のほか、後述のように江戸時代の書物にも記されている。日本列島にキリスト教が本格的に伝来し、キリシタンの集団が初めて誕生したのは周知のとおり1549年のザビエルの来日が契機である。本章では初めに16世紀の京都のキリスト教の歴史についてⅠ章で挙げた先行研究を踏まえつつ、第1表を元に概観する。

先述のように京都に初めてキリスト教が伝来したのはザビエルらが京都に到着した1551(天文20)年のことである。ザビエルは全国でのキリスト教布教の許可を天皇と将軍に得ようとしたが、当時は天皇や将軍には力がなかったうえ、天皇に謁見できなかったため、京都での布教を断念した。その後1559(永禄2)年にガスパル＝ヴィレラが日本人キリシタンのロレンソとともに入京し、本格的に布教を始めた。当初は布教が困難で、宣教師の宿への投石や布教中の罵倒があったが、第13代将軍足利義輝への謁見と布教許可をきっかけに布教が進展し、翌1560(永禄2)年春には100人のキリシタンが誕生した。翌1561(永禄3)年には姥柳町(蛸薬師室町西入ル)の一軒家を購入し、教会とした。この購入については後で詳しく説明する。同年、三好・六角の争乱で、ヴィレラたちは入京できず、残された信徒たちが教会を守り、救貧事業を行った。翌1563(永禄5)年には松永久秀が宣教師追放を企てたが、この頃に京都周辺の大名とその家臣がキリシタンに改宗しており、その中には高山右近もいた。1565(永禄7)年にルイス＝フロイスが入京し、布教を開始したが、この頃に松永久秀が三好義継と共に謀して将軍足利義輝を殺害した。そして京都の実権を握ると、キリシタン迫害を開始したため、フロイスやヴィレラは京都から一時的に退去した。また、正親町天皇が宣教師追

第1表 16世紀後半から17世紀前半の京都のキリシタンの概略

| | 年 | 事項 |
|-------|-------------|--|
| 布教開始期 | 1551(天文20)年 | フランシスコ＝ザビエルらが京都に到着 |
| | 1559(永禄2)年 | ガスパル＝ヴィレラが日本人キリシタンのロレンソと入京し、布教開始 |
| | 1563(永禄6)年 | 松永久秀が宣教師追放を企図、京都周辺の大名とその家臣がキリシタンに改宗 |
| | 1565(永禄8)年 | ルイス＝フロイスが入京、布教開始 正親町天皇が宣教師追放の綸旨を發布 |
| 布教進展期 | 1568(永禄11)年 | 織田信長が上洛 |
| | 1570(元亀元)年 | 年末にオルガンティーノ＝ニエッキが到着 |
| | 1575(天正3)年 | 夏に京都南蛮寺の着工開始、翌年完成 |
| | 1577(天正5)年 | 「都の市民は最初われわれを嫌忌したが、今は敬意を表わし、悪言を放つ者もほとんどなくなった」(オルガンティーノの手紙) |
| | 1579(天正7)年 | 都(京都)のキリシタンの人数は200～300人 |
| 迫害期 | 1587(天正15)年 | 豊臣秀吉が伴天連追放令を発令、京都南蛮寺を破壊 |
| | 1596(文禄5)年 | 二十六聖人の殉教 |
| | 1604(慶長9)年 | 上京のだいうす町に慶長天主堂を建立 |
| | 1612(慶長17)年 | 慶長天主堂を破壊 |
| | 1619(元和5)年 | 52人のキリシタン(子ども、妊婦含む)が六条河原で火あぶりの刑に(元和の大殉教) |

『京都の歴史 第4巻 桃山の開花』、『日本キリシタン史の研究』、『京都大事典』、『16 京都のキリシタン遺跡』(<https://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/rekishi/fm/nenpyou/pdf/ffile/bunkal6.pdf> 2020年12月1日閲覧)をもとに筆者作成。

放の綸旨を發布したことで、京都では武士と朝廷によるキリシタン排除が展開されることとなった。加えて、京都の住民の多くが法華宗に帰依していたが、その中でキリシタンを排撃する者も多かった。

このように京都のキリシタンは八方塞がりの状態であったが、1568(永禄10)年に織田信長が上洛すると状況は一変する。信長は三好三人衆を破り京都の実権を握ったが、彼はキリシタンに対しては好意的であった。翌年、ルイス・フロイスは京都に戻り、織田信長と足利義昭に謁見したのち布教許可を得た結果、キリシタンへの迫害は一応の終焉を迎えた。しかし、法華宗による激しいキリシタン反対もあり、布教はなかなか進まなかった。

1570(元亀元)年の暮れにオルガンティーノ＝ニエッキが京都に到着した。この頃も相変わらず戦乱が続いたが、信長が松永久秀や法華宗、延暦寺を次々に撃破したためキリシタンを迫害する勢力は減少していった。キリシタンたちはようやく安定して活動ができるようになり、やがて新しい教会堂の建設を望むようになる。後述のように有力大名の後押しやキリシタンたちの努力もあり、1573(元亀3)年に下京で南蛮寺の建設が始まり、翌年に完成した。冒頭で述べたように、南蛮寺では礼拝にくわえて救貧事業が行われていた。ただし、その後も京都の町中での布教は難しかったようで、1579(天正6)年の京都周辺のキリシタンの人数をみると、京都は200～300人に対し、周辺の町村では15000人がキリシタンとなっており、このうち高山右近の高槻城下のキリシタンは8000人ほどであった。信長の庇護の下、京都の周辺地域での布教が進み、安土城下にはセミナリヨ(神学校)が建設されていた。ただし、オルガンティーノの1577(天正4)年の手紙には「都の市民は最初われわれを嫌忌したが、今は敬意を表わし、悪言を放つ者もほとんどなくなった」とあることから、次第に京都の町中でもキリスト教を受容する風潮が少しずつ強まっていった可能性も指摘できよう。そ

の一つの例として、曲直瀬道三の入信が挙げられる。朝廷の典医であった道三は診察を契機としてポルトガル人宣教師と親交を持つようになり、やがて洗礼を受けキリシタンになり、門弟 800 人をひきいて教会の活動に尽力した。

その後、織田信長に代わって豊臣秀吉が天下統一すると、キリシタンへの弾圧・圧迫を強化したため、京都での布教が困難になった。秀吉は 1587（天正 15）年に伴天連追放令を發布し、南蛮寺は破壊された。やがて巡察使ヴァリニャーノが秀吉に謁見し、京都での布教がふたたび可能になり、1594（文禄 3）年には京都で 500 人ほどが新たに洗礼を受けたほか、1596（慶長元）年には救貧活動のための療養施設が京都に建設され、あるキリシタン夫妻が中心となって活動が行われた。その一方で秀吉のキリシタン弾圧の方針はその後一貫しており、1596 年に二十六聖人の殉教が起きた。京都と近郊のキリシタンが逮捕され、四条堀川付近の妙満寺付近から出発して市中を引き回されたのち、一条戻橋付近で左耳を削がれてからさらに市中引き回しの後、移送先の長崎で火刑に処せられた⁷⁾。

やがて関ヶ原の戦いを経て徳川家康によって幕府が開かれ、江戸時代が始まる。幕府は当初、キリシタンに対して禁教政策はとっていなかった。京都では慶長年間のキリシタン墓碑が出土しており、この時期は京都を含む各地でキリシタンの存在が許されていたことを物語っている。しかし、幕府はその後キリシタン禁教政策に舵を切り、京都でも大規模な弾圧が展開された。江戸時代の京都のキリシタンの状況については次章で詳述する。

2. だいうす町と教会堂

第 2 図は 16 世紀の京都の都市空間である。応仁・文明の乱とその後の度重なる戦乱によって京都は焼野原と化した。町衆は戦国の乱世にあって上京と下京にそれぞれ町を再建し、町全体に土塁や堀をめぐらし、出入りに木戸や釘貫を設置して防衛にあたった⁸⁾。この時代の京都は城塞都市であったが、町衆が自衛のために都市を要塞化せざるを得なかったのは、天皇や将軍の権威が衰え、京都の都市空間の維持管理が困難であったためである。「京を見渡し侍れば、上下の家、昔の十が一もなし。只民屋の耕作作業の體大裏は五月の麦の中あさましとも申にもあまりあるべし」⁹⁾ という連歌師の言葉がこの頃の京都の都市空間の状態を如実に物語っている。

こうした状況の中、前述のように織田信長の上洛によって京都のキリシタンたちは布教をはじめとする日常的な宗教活動を行えるようになった。そして、その中で次第に第 2 図の場所にだいうす町を形成していったと考えられる。

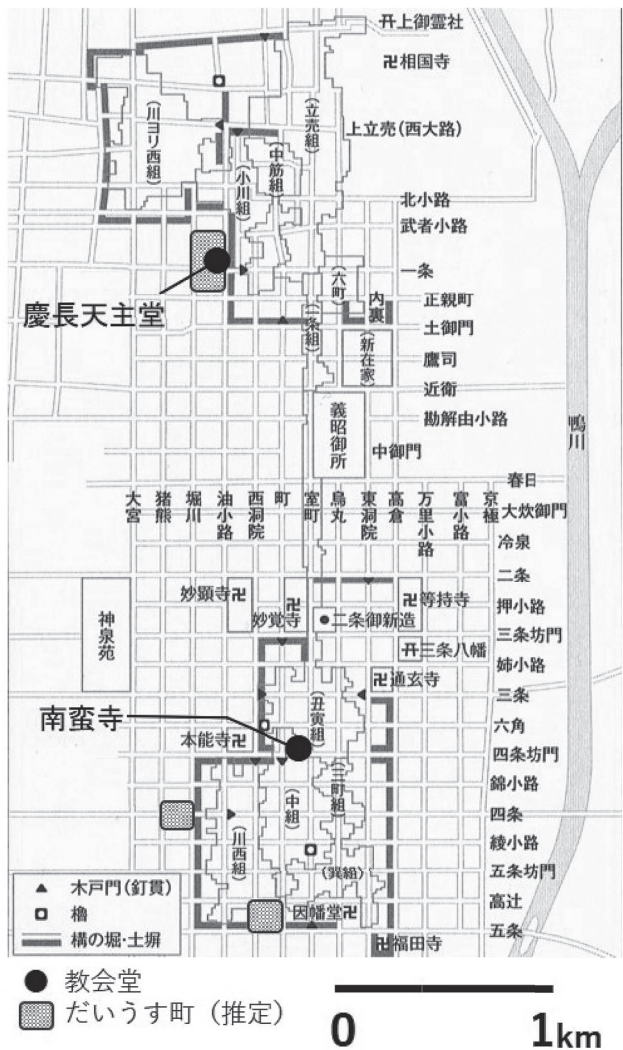
ところで、上京、下京ともにだいうす町は土塁に隣接する都市外のエリアに立地する一方、教会堂の位置が大きく異なっていた。上京ではだいうす町の中に慶長天主堂（教会堂）が建立されたが、下京では室町蛸薬師という、城塞都市の中心に建設されていた。これらの事実を踏まえ、本稿ではだいうす町と教会堂の立地について考察していく。

はじめにだいうす町の位置についてであるが、キリシタンが登場した 16 世紀半ばの時点で上京、下京ともに両側町が形成され、地縁的なコミュニティがすでに町の自治を行っていた¹⁰⁾。そのため、キリシタンという新規の集団、いわば「新参者」が上京や下京の土塁の中に新たに両側町を形成することは困難であったことは想像に難くない。また、町ごとに武士奉公人や芸人への家の売却を禁止する規定を定めていたことから明らかなように、町外の人間への不動産の売却を固く禁じていたため、キリシタンが土地家屋を購入して町中にコミュニティを築くどころか、居住することが困

難であった¹¹⁾。くわえて上京、下京ともに法華宗に帰依する町衆が多く、キリスト教と対立関係にあったことから、キリシタンが町中に居住する余地がなかったと考えられる。

他方で、教会堂の立地を見ると、上京の慶長天主堂や下京の教会はいずれもだいうす町の中に建てられていたのに対し、南蛮寺は先述のように下京という城塞都市の中心部に建立された。入京した宣教師たちは当初、姥柳町の人々に内密に仏僧から1561(永禄3)年に購入した下京の家屋を教会として活動していた¹²⁾。しかし購入した建物は「すでになかば腐食し、四本の柱の三本までにひびが入り、一本は曲がった」¹³⁾状態であったことにくわえ、数百人のキリシタンが誕生していた状況もあり¹⁴⁾、新しい教会堂の建設が望まれていた。やがて織田信長入京から7年後の1575(天正3)年の夏に南蛮寺の着工が開始された。この時、信長や彼の家臣で京都所司代であった村井貞勝が南蛮寺建設にあたって便宜や庇護をキリシタンに対して行ったほか、高山右近をはじめとする有力なキリシタンたちの協力によって1576(天正3)年に完成し、献堂式が行われた。この時の信長や村井貞勝の動きに注目すると興味深い事実が浮かび上がってくる。そもそも南蛮寺建設に多くの京の住民が反対しており、彼らは京都所司代であった村井貞勝に建設中止を訴えていた。しかし貞勝は住民をなだめ、南蛮寺建設の動きを保護した。そこで住民たちは安土の信長に建設中止の陳情を行ったが、結局彼らの訴えが聞かれることはなかった。くわえて、この時期は安土城建設にくわえ、禁裏の造営の最中であったことから、禁裏の建築目的以外での材木などの他国からの購入は禁止されていたのだが、南蛮寺の建築資材確保だけは例外的に認められていた¹⁵⁾。すなわち、小型の天守閣のような三層構造の南蛮寺を下京の中心部に建設することができたのは、信長という強力な武力と権力を持った庇護者の存在が決定的だったのである。これは後に上京と下京の都市内部に教会堂が二度と建設されることがなかった点からも確認できよう。中世から近世にかけての京都という都市空間ではさまざまな集団が存在し、互いにせめぎあっていた。こうした状況下でキリシタンがその居場所を確保することは決して容易ではなかったのである¹⁶⁾。

なお、本章をまとめるにあたり、上京のだいうす町のロケーションについて少し考えておきたい。上京のだいうす町は油小路一条を中心とする一帯に存在しており、町の中心には慶長天主堂が建設されていた。この油小路一条というエリアは中世の京都において三つの意味での境界領域的な要素



第2図 戦国時代の京都の都市空間

『信長が見た戦国京都 城砦に囲まれた異貌の都』、『京都中世都市史研究』、『京都の歴史 第4巻 桃山の開花』をもとに筆者作成。

を持っていたが、その鍵となるのが一条戻橋である。一条戻橋は平安時代から京域の物理的な境界とみなされていた¹⁷⁾。それが中世末期の都市空間の範囲に影響したかどうかは定かではないが、図にあるように、上京の土塁は油小路沿い、すなわち一条戻橋以東に建設されていた。橋にくわえ、土塁と堀は上京の都市空間を物理的に分ける境界としての構造物だったのである。こうした構造物は都市の領域を物理的に分けるだけでなく、その存在自体が都市空間の内と外およびその境界を可視化していった。一条戻橋はまた、霊的な境界線でもあった。この橋は様々な伝説の舞台として文学作品にたびたび描かれていた。たとえば、一条戻橋の上では渡辺綱が美女に化けた鬼の片腕を切り落とし、安倍晴明が橋占を行い、橋の下に隠した職神を使役していた。すなわち、この世とあの世、人間界と異界の境界線であり、あるいは二つの世界をつなぐ経路として描かれ、人々に認識されていたのである。都市空間の物理的かつ霊的な境界にくわえ、一条戻橋は社会的な境界としての機能も有していた。中世の京都では犯罪者をさらす場であった。犯罪者とみなされれば社会から切り離され、罰を受ける。それは社会的制裁としての刑罰を受けるべき犯罪者として人々にさらされるとともに、処刑による命の終わり、この世からあの世への旅立ちを象徴する場所であった。千利休の首がさらされたのも一条戻橋であった。二十六聖人の殉教において、秀吉の命で下京のだいうす町を出発して市中を引き回されたキリシタンたちは一条戻橋で耳を削がれてから長崎に送られ、火刑に処されたのである¹⁸⁾。

こうして一条戻橋は中世の京都において物理的、霊的、社会的な要素を内包し、これらは相互に関連しあい、その意味や機能を維持・増幅していった。そしてそこは中世末期に上京のキリシタンたちがコミュニティを構築し、天主堂を建設して神に祈りを捧げていた場所であった。すなわち、中世の京都でキリシタンたちが置かれていた社会的なポジションを象徴するような場所であったといえるが、言い換えれば彼らはこうした場所にしか居住できなかったということになる。中世のキリシタンの社会的な立場は、彼らがどこに存在するかによって大きく異なっていたのではないだろうか。そこがキリシタン大名という権力者の庇護を受けられる領地なのか、それとも京都のような権力者のバックアップを受けるのが困難な都市なのかによって、キリシタンたちの立場は大きく変わっていた。キリシタンという集団をひとくくりにして同時代の中で扱われることが案外多いが、たとえば日本列島—畿内—山城国—京都—上京のように異なる複数の空間スケールの視点で捉えるとき、そこに存在していたキリシタンの置かれた状況や社会的地位、立場を間接的にであっても再現することができるのである。

Ⅲ. 江戸時代の京都のキリシタンをめぐる記憶と記録

1. 江戸時代の京都のキリシタン

江戸時代に入ると幕府によるキリシタン禁制政策が強化されていった。とはいえ、江戸時代の最初期はまだキリシタン禁制は行われず、前章で述べたようにだいうす町が戦国期の上京と下京それぞれの市街地に隣接するエリアに立地していた。上京のだいうす町の中心部には慶長天主堂が建立され、1605（慶長9）年頃には京都で300人以上が洗礼を受け、伏見や大坂でも数百人単位のキリシタンが誕生するなど¹⁹⁾、布教活動は順調に進んでいた。その後、幕府は1614（慶長18）年末に「伴天連追放令」を発令し、翌年には大久保忠隣が入京、洛中のだいうす町に建てられていた教会堂が

破壊された。慶長年間の幕府のこうした取り締まりの目的は、大坂の陣で豊臣方とキリシタンが結びつくのを防ぐ事であった²⁰⁾。その後、キリシタンへの弾圧が更に本格化し、1619（元和5）年に間に洛中の52人のキリシタンが六条河原で火刑に処せられるなど、全国的なキリシタン弾圧が展開された（元和の大殉教）。

江戸時代前期（17世紀）には「幕府直轄都市として幕令に対する以前に、幕府の意図を先取りする」²¹⁾キリシタン取り締まりが進められた。具体的には、元和年間以降のキリシタンの摘発および処刑にくわえて、寺請制度の確立や宗門改帳の作成、宗旨改などが厳密に行われた²²⁾。キリシタンは宗旨変え、すなわち棄教した後も本人と類族が幕府の監視対象となっており、清水によれば「類族の一生は（中略）出生から死亡にいたる迄、当人の生活に変化があれば、主要なことはすべて町の年寄を通じて役所に報告され」ており、「町中の監視と官憲による掌握の下に生活」²³⁾を営まなければならなかった。キリシタンの類族は「邪宗門の後裔として警戒され、「犯罪者」として処遇され」²⁴⁾ていたのである。寛永期になるとキリシタン禁制の制度がさらに整備され、京都では借家を追い出される貧しいキリシタンの様子が宣教師によって書き記されている²⁵⁾。

このように、江戸時代の京都はキリシタンの存在が許されない空間となり、幕府の弾圧によって処刑され、あるいは棄教したため、17世紀の終わり頃には京都からキリシタンは姿を消すこととなった。他方、江戸時代には洛中のキリシタンおよびだいうす町を想起させる物語にくわえ、キリシタンがかつて存在していた歴史的事実を直接記述した書籍が著わされ、出版されていた。そこで次節ではこの2つの出版物について検討していく。

2. テキストに書かれたキリシタンとだいうす町

はじめに洛中のキリシタンおよびだいうす町を想起させる物語の例として、井原西鶴の「十夜の半弓」を宗政（1968）の先行研究に基づいて紹介する。宗政によると、井原西鶴は下京に慶長年間まで存在していただいうす町の教会堂や町が破壊され、キリシタンが元和年間の幕府によって弾圧される契機となったある事件を下敷きにした殺人事件の物語を執筆したという。それは伏見稲荷社の神幸時にキリシタンが神輿に矢を放つという事件であった。宗政は元和年間のキリシタン弾圧事件の契機となった神輿射撃事件と「十夜の半弓」の共通点を下京のだいうす町と因幡堂、六条の大仏の位置関係を地図化によって明示した。また、井原西鶴の当時の作風や立場性が彼をキリシタンの存在や弾圧の歴史的事実へと関心を寄せる契機になったことを明らかにしている²⁶⁾。そして、江戸時代に著された様々な物語について、「キリスト教に関する事件や事象が、仏教徒に関する事件とか事象とかして、近世のキリスト教禁止以後においては、文学作品や芸術作品に制作され」、「キリスト教的なものが変形されて仏教的なその形態をとることによって、禁教下において存続し、あるいは発展」した可能性を指摘している²⁷⁾。

ただし、キリシタンにまつわる事件や出来事を含め、キリシタンの存在を直接的に表現した書物は江戸時代に複数出版されている。もちろん、幕府によるキリシタン禁制下にあってはキリシタンの事を気軽に描くのが難しかったのは想像に難くないが、興味深いことに、地理や地誌に関連する出版物の中にキリシタンの情報を直接記載したものが複数確認できる。その中にはキリシタンがかつて存在していた歴史的事実を詳述したものもある。

これは具体的には名所地誌本のことであるが、江戸時代以降に社会の安定化や人々の経済力の増加と文化の共有の拡大、歌枕—かつて名所（ナドコロ）と呼ばれた—への人々の憧れ、そして出版文

化の発展を背景として出版された、観光案内と地誌本を兼ね備えた書物を名所地誌本と呼ぶ²⁸⁾。こうした名所地誌本には京都の名所となった神社仏閣にくわえ、通りや町の位置、歴史、由来といった地誌情報が記載されているが、その中に16世紀後半から17世紀初めのキリシタンに関する情報の記述が複数例確認できる。

たとえば、1665(寛文5)年発行の『京雀 卷第三』には下京のだいうす町について「たかつじさがる だいうす町 往當此町に伴天連が住て堤字子の法を勤しを太閤秀吉公禁制せられ寺を壊れたり」²⁹⁾と記されている。ここでは豊臣秀吉による伴天連追放令や南蛮寺の破壊といったキリシタン弾圧の歴史的事実の記載が見られるが、江戸時代以降の幕府による弾圧については触れられていない。これはリアルタイムでのキリシタン弾圧がまだ続いていたためか、または一段落した直後であったことから、幕府によるキリシタン弾圧を記述しにくかった可能性が考えられる。

しかしながら、その20年後の1682(天和2)年に出版された『雍州府志』の記述は注目すべき内容である。これは黒川道祐が著した江戸時代前期の山城国の地誌本で、洛中の町や建物だけでなく辻子つまり中世以降に新たに作られた小路についても述べられている。この中の油小路一条の辻子について同書は「一条の北油小路と堀河(堀川)との間に在り近世耶蘇宗の門の寺斯の町に在り倭俗徒斯を誤(っ)て大宇須と謂う故に今大宇須の辻子と称す(太字は筆者による、以下同じ)」³⁰⁾つまり、「かつてこの場所にはキリシタンのコミュニティと教会堂が建っており、キリシタンの神の名を日本語で聞き間違えたのが辻子名の由来である」と記している。ここは上京のだいうす町のことであるが、注目すべきは17世紀の、それもキリシタン弾圧からさほど時間が経過していない時期に油小路一条がキリシタンの信仰していた「デウス」に由来する「だいうす」と呼ばれていたことにくわえ、その名称の由来を堂々と記述している点である。油小路一条にせよ、高辻松原にせよ、キリシタンが存在していたという事実は名所地誌本に情報として記録されると同時に、人々の間で記憶として継承される場所だったのである。

その後、江戸時代後期に出版された名所地誌本の中にもいくつかキリシタン関連の記述が確認できる。1762(宝暦12)年の『京町鑑』には上京のだいうす町について「油小路頭町 此町東側東入所は戒光寺の辻子也 同町南に東入所は革堂の辻子也 同町西入町を ㊦だいうすの辻子一條上ル二丁目 同町西の方㊦富田之辻子一條上ル」³¹⁾との記載があり、1830(天保元)年の『都名所車』では「だいうすの辻子 武者小路小川西へ入町」³²⁾と記されていることから、江戸時代を通じて「だいうす」という呼び名が見られたことが分かる。ただし、江戸時代後期に森幸安が作成した「中古京師内外地図」にはこの一帯に村雲大休寺が描かれていることから、寺院の名称である大休(だいきゅう)が大白に転じ、そこから「だいうす」と呼ばれるようになったという説も存在する³³⁾。すなわち、だいうす町という地名の情報、言い換えれば地誌情報が江戸時代を通じてキリシタン由来から仏教由来へと変化した事が指摘できる。そしてこの事実は、江戸時代後半という、キリシタン弾圧が沈静化してしばらくの時間が経過するにつれてキリシタンに関する情報が次第に失われていった可能性を示唆している。すなわち、江戸時代前期においては、キリシタンに関する記憶が書籍や物語の著者を含む人々にとって強い実感と関心を伴って共有されていたが故に、キリシタンやだいうす町の地誌情報が記述されたといことではないだろうか。ただし、明治時代初期に出版された『京都坊目誌』は『雍州府志』の記述を引用し、キリシタン由来の文章を記載していることから、時代の変化だけではなく、引用元となる文献の重要度や知名度により、結果としてキリシタンをめぐる記録／記憶が近世を通じて一定の影響を持ちながら継承されていたと考えられる³⁴⁾が、こうした点に

についてはなお不明な点や課題が多いため、別稿で改めて議論していきたい。

さて、これまで見てきたように、江戸時代の様々な出版物に京都のキリシタンの痕跡が確認されたわけであるが、本章を締めくくるにあたって次の点を指摘しておきたい。当時の日本列島全体というマクロな空間スケールで見れば、江戸時代に幕府がキリシタンを弾圧し、キリシタンに関する情報をタブー視していたことは疑いようがない。その一方で、京都という都市内部の町や辻子といったミクロな空間スケールで見た場合、キリシタンに関する記録と記憶は様々な出版物の中に物語の下敷きとして、あるいは地誌情報として人々の間で共有されていたことが分かる。また、出版物の中で文字化するというところから、キリシタンにまつわる記憶と記録がそれぞれの著者自身の中で往還する様子を読み解くこともできよう。

Ⅳ. 近代以前の京都とキリシタン—結びに代えて—

本稿では日本にキリスト教が伝来してから徳川幕府の禁教政策によるキリシタン消滅とそれ以降の時代における京都のキリシタンをめぐるいくつかの位置づけについて概観してきた。特に、中世から近世を通してキリシタンという存在の意義や意味を検討する一つの契機として、キリシタンの物理的なロケーションと彼らの存在に由来する地名と地誌情報を通じて京都のキリシタンの歴史地理学的な検討を試みた。

近現代の京都のキリスト教と本稿が採り上げた中近世のキリシタンとの間に直接的な接続は現時点ではほぼ皆無である。これはたとえば長崎の潜伏キリシタンの歴史が近代以降のキリスト教の歴史と接続する状況と比較すれば一目瞭然であろう。京都という都市空間におけるキリスト教は近世を通じて一度断絶した。それだけではなく、キリシタンの存在に関する記憶・記録もまた、近世を通じて物語や名所地誌本といった出版物によって伝えられてきたが、近代以降にその記憶・記録がキリスト教と接続した形跡も見られない。それはたとえば、現在の京都市におけるキリスト教会の立地状況と比較した際、かつての дай 町付近に教会がほとんど存在していないことから確認できよう³⁵⁾。

ただし、キリシタンに限らず京都という都市空間に存在していた様々な個人、集団、文化、それらに関わる記憶のうち、中世から近世を経て近代に至る時代の変化の中で断絶もしくは消滅したものは案外多いのかもしれない。こうした変化は京都という都市の地理的範囲や空間構造、社会構造などの大いなる変化と相互に関係しあうものであったらうし、絶えざる変化を一貫して続けてきたことこそが京都という都市の一貫した性質であるのかもしれない。とりわけ、京都内部ないし日本列島内部の影響のみで京都の文化が成立したわけではなく、ヨーロッパやアジアを含むより広い空間スケールの影響も絶えざる変化に少なからず影響を及ぼしてきた点も忘れてはなるまい。

とはいえ、京都に限らず各地の潜伏キリシタンの痕跡や記録／記憶がキリスト教を含む近代社会と完全に断絶したわけでは必ずしもない。長崎の例からも分かるように、中世と近世、近世と近代は大きな断絶の中に垣間見えるつながり—それは慣性とも言い換えられるか？—が時として思わぬ形で我々の眼前に顕現することもある。今後もし京都におけるキリシタンと近代以降の社会とのつながりを見出すことがあれば、その時京都の新たな都市史（誌）のページが開かれることになるのかもしれない。

〔付記〕

本稿は筆者が2018年度に立命館大学文学部で担当した専門科目「京都学特殊講義Ⅲ」の「第5回目 京都の異文化交流(2)」と2019年度に佛教大学歴史学部で担当した専門科目「地誌学概論」の「第12回目 京都の異文化交流(2) —キリスト教と京都」の各講義内容、2018年5月19日に行った講演「京都とキリスト教—その意外な姿—」(京都歴史回廊協議会 第16回京都学セミナー、於立命館大学)と、2019年6月28日に行った講演「京都・キリスト教・マイノリティ—戦国から現代—」(京都部落問題研究資料センター主催「2019年度差別の歴史を考える連続講座第2回」、於京都部落問題研究資料センター)の各講演内容をもとに作成した。本稿の作成にあたり、JSPS 科研費「視覚資料の空間表現に関わる歴史地理学と東洋美術史の学際的研究」19K01193(研究代表者:長谷川 奨悟)とJSPS 科研費「近代日本におけるキリスト教会の立地と都市形成の相互関係に関する地理学的研究」20K01166(研究代表者:麻生将)の助成を受けた。

注

- 1) 国立国会図書館デジタルコレクション『南蛮寺興廢記』7頁。
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2541597> 2020年11月27日閲覧。なお、『南蛮寺興廢記』は江戸時代前期から中期にかけて排耶を目的に著された「実録的排耶御用小説」であり、江戸時代を通じて何度か改編・出版された。詳細は①海老沢有道『南蛮寺興廢記・妙貞問答』平凡社、1964、3-8頁、②海老沢有道ほか校注『キリシタン書 排耶書』、岩波書店、1970、593-606頁、を参照のこと。
- 2) たとえば①笠井恵二「十七世紀後半の京都とキリスト教—家光から綱吉まで—」、京都産業大学日本文化研究所紀要第6号、2001、153-175頁、②清水絃一「キリシタン類族の断絶—京都上京下西陣組における—」中央大学論集1、1980、15-35頁、③清水絃一「天正十四年の布教許可状をめぐる」中央大学論集第10号、1989、1-14頁、④村井早苗『天皇とキリシタン禁制 「キリシタンの世紀」における権力闘争の構図』、雄山閣出版、2000、194頁、などがある。
- 3) 井上清恒「南蛮寺興廢記と南蛮医学の発端」昭和医学会雑誌第32巻第9号、1972、1-6頁。
- 4) 近年の先行研究として、たとえば①川崎桃太『フロイスの見た戦国日本』中央公論新社、2003、254頁、②五井野隆史『日本キリシタン史の研究』吉川弘文館、2002、377頁、③松本和也『イエズス会士がみた「日本国王 天皇・将軍・信長・秀吉」』吉川弘文館、2020、218頁、などが挙げられる。
- 5) ①丸川義広「一条通紙屋川出土のキリシタン墓碑」(財団法人京都市埋蔵文化財研究所編集・発行『つちの中の京都2』、2001、63-64、所収)、②財団法人京都市埋蔵文化財研究所編集・制作・監修『京都市考古資料館開館30周年記念 京都 秀吉の時代—つちの中から—』、ユニプラン、2010、50頁。
- 6) 畑中みゆき「京・大坂におけるキリシタン禁教政策について」、史泉第61号、1985、31-48頁。
- 7) 小林丈広・高木博志・三枝暁子『京都の歴史を歩く』岩波書店、2016、74-75頁では、二十六聖人の殉教の背景として、文禄の大地震や朝鮮出兵に由来する社会不安に対する豊臣政権の統制強化のためであったと指摘されている。
- 8) 詳細については、たとえば①河内将芳『信長が見た戦国京都 城砦に囲まれた異貌の都』洋泉社、2010、222頁、②高橋康夫『京都中世都市史研究』、思文閣出版、2003、495頁、などを参照のこと。
- 9) 国立国会図書館デジタルコレクション『宗長日記』(『群書類従:新校 第十四巻』、内外書籍株式会社、1928、326頁、所収)。<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1879776> 2020年11月27日閲覧。『宗長日記』は同時代の著名な連歌師の柴屋宗長が1522(大永2)年から1527(大永7)年にかけての出来事を記した日記である。
- 10) ①林家辰三郎責任編集『京都の歴史4 桃山の開花』、京都市、1979、562-573頁、②前掲8) ②。
- 11) 前掲4) ②、103-105頁。
- 12) 前掲4) ②、103頁。
- 13) 前掲4) ①、29頁。
- 14) 前掲10) ①、204頁

- 15) 前掲 10) ①、208-209 頁。
- 16) なお、前掲 10) ①、484 頁には京都所司代であった板倉勝重が慶長天主堂の建設の援助を行ったとある。ただ、上京においては江戸幕府のバックアップがあったとしても、城塞都市のエリア内に教会堂を建てるのが困難であったことを物語っている。あるいは、キリシタンたちが自身のコミュニティの中心に教会堂を建てるのを希望したのかもしれない。
- 17) 平凡社編集・出版『京都市の地名』、1979、623 頁。
- 18) 前掲 17)。
- 19) 国立国会図書館デジタルコレクション『日本西京史 下巻』203-204 頁。
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/943461> 2020 年 11 月 27 日閲覧。『日本西京史』はフランス人のイエズス会士ジャン・クラッセ (1618-1692) が 17 世紀ごろの日本でのキリシタンの活動状況をイエズス会宛てに報告した書簡等を編纂したものである。ただし、『キリスト教大事典』にはクラッセの記述内容には史料的な欠陥が多く、史料としての価値は低いと述べられているが、前掲 2) ②によると 1688 (元禄元) 年の京都のキリシタンとその類族が 439 人であったことから、17 世紀前期の本格的なキリシタン弾圧開始以前の人数としてはそれほど大きな矛盾や齟齬、誇張はないと考えられる。
- 20) 前掲 6)、36-39 頁。
- 21) 前掲 6)、46 頁。
- 22) 前掲 6)、43 頁。
- 23) 前掲 2) ②、25 頁。
- 24) 前掲 2) ②、25 頁。
- 25) 前掲 6)、41 頁。
- 26) 宗政五十緒「だいうす町とおらんだ西鶴」文学 VOL.36 (5)、1968、71-80 頁。
- 27) 前掲 26)、80 頁。
- 28) 長谷川奨悟「近世上方における名所と風景 - 秋里籬島編『都名所図会』・『撰津名所図会』を中心に -」人文地理第 64 巻第 1 号、2012、pp19-40。
- 29) 臨川書店内新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書 第一巻』、臨川書店、1993、386 頁。『京雀』は浅井了意が実用的な地誌書として 1666 (寛文 5) 年に『京童』、『都物語』に続けて出版した。
- 30) 臨川書店内新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書 第十巻』、臨川書店、1994、609 頁。『雍州府志』は黒川道祐が漢文体で著した山城国の地誌書である。同時代の地誌書類の中でも初の「総合的組織的地誌」として高く評価されている。
- 31) 臨川書店内新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書 第三巻』、臨川書店、1994、214 頁。『京町鑑』は 1763 (宝暦 12) 年に出版された地誌書である。
- 32) 臨川書店内新修京都叢書刊行会編『新修京都叢書 第五巻』、臨川書店、1994、486 頁。『都名所車』は 1714 (正徳 4) 年に出版、1731 (享保 15) 年と 1830 (文政 13) 年に再版された小型案内記である。詳細は谷崎友紀「近世京都における旅人の観光行動—旅日記と小型案内記との比較をとおして—」立命館地理学第 26 号、2014、47-58 頁、を参照のこと。
- 33) 佐和隆研ほか編『京都大事典』、淡交社、1984、566 頁。
- 34) なお、この点に関連して、明治末から大正初期に発行された『大日本地名辞書』で下京の項目で南蛮寺についての記載が見みられるが、その内容は『南蛮寺興廢記』の前掲 1) の部分を引用しながら記述したものと考えられる。吉田東伍『大日本地名辞書 上方』富山房、1913、34-35 頁。
- 35) 麻生将「1916 年から 2013 年の京都市におけるプロテスタント教会の立地」立命館文学第 649 号、2017、1-14 頁、によると、上京と下京それぞれのだいうす町のエリアをはじめ、近代以降にキリスト教会がほとんど立地しなかった複数の空白地帯が京都市内に認められる。

(同志社大学人文科学研究所嘱託研究員 (社外))